



教師が
出会うた

スリランカ

JICA海外研修から 4

「援助」から「パートナー」へ

地滑りで集団移転

着飾った子供たちが一列に並び、花束を両手に研修団を待ち受けていた。コロンボから車で6時間のワラパネ郡スボーダーガマ地区のコミュニティ。2007年の地滑りで被災し集団移転を余儀なくされた71世帯250人が暮らす。ここでは日本人による草の根の支援活動として、函館市に事務所を持つNPO法人アップカスが復興支援を展開している。

アップカスは同地区で被災者の住宅建設をはじめ、農業や食品加工で生計を立てられるよう支援している。代表の石川直人さん(33)は東京出身。2002、05年に青年海外協力隊員としてスリランカで活動した。任期を終え日本に帰る直前発生したスマトラ

復興支援のNPO「アップカス」

沖の大津波(04年12月)を契機に、被災者を支援するためアップカスを結成した。

地震の「失敗」教訓に

この地区の復興支援では大津波での被災地支援で経験した「失敗」を教訓とした。被災者との十分な対話を欠いた支援側の都合による援助はさまざまな偏りが生まれ、被災者間の信頼関係や被災者の自立心が失われた。住宅など生活基盤が全て用意された津波被災者と、移転地周辺の貧しい村人との間には、あつれきが生じた。

「被災者イコール『かわいそう』『何もできない人』という枠にはめ込みがちだが、被災者にもできることはいっぱいある」と持論を説く石川さん。同地区支援では被災者と話し合い、住宅資材を提供

して被災者に自ら働いてもらった。石川さんは「彼らは技術的なこともよく知っていたし、予想以上に力があつたと受け止める。

アップカスのスリランカでの



スリランカで草の根の支援活動を続ける石川さん(右から2人目)

活動は環境保全活動やへき地・農村部の教育支援、視覚障害者への就職支援など幅広い。石川さんは「復興への道筋が見えた。今は援助ではなく、パートナーになるための種まきをしている」と話す。

研修団は、農村

の女性から家庭料理のもてなしを受けた。アップカスが修繕支援をしたコミュニティでは歓迎会が開かれ、子供たちがはにかみながらもダンスや歌を披露した。

音更下音更中の

谷崎城教諭(37)は「子供の姿に涙が出た。無意識のうち途上国を

「上から目線」で見えていなかっただろうか」と胸の内を語った。子供たちと教師たちは折り紙など時間の許す限り遊んだ。折り紙の鶴や風船を大事そうにポリ袋やポケットに入れて持ち帰る子もいた。

子供の笑顔に未来

「子供たちの歓迎は、協力隊員や石川さんのこれまでの活動のおかげ」。教師たちはスリランカで汗を流した日本人への感謝の言葉を口々に語った。別海中央小の住野谷彩教諭(25)は「子供たちははじける笑顔にスリランカの明るい未来を見た感じがした」と視察を振り返った。

11人の教師たちがスリランカで得た貴重な経験がきっかけで、北海道の子供たちの未来に生かされると確信した。(澤村真理子、おわり)